

【書評】

下渡敏治著

『世界食紀行－マンハッタンからボルネオまで－』

小野 洋*

新型コロナの厄災は、研究者、とりわけ現地調査をメインとする社会科学系研究者に激しく降りかかった。評者は海外調査の科研を持っているが、領収書をどうやって切るか、長いこと呻吟している。引き出しの中のパスポートは、2019年12月のスタンプを最後に、次の押下を待ち続けている。

著者の下渡先生（現日本大学名誉教授）は、とにかく「仕事をする」先生である。2018年3月に停年退職されるその時まで、書類が山積みとなった研究室で、精力的に調査研究を続けられていた姿が目には焼き付いている。キャンパスを離れた後も、その姿勢は変わっておられない。本書がその証左である。

ところで、コロナ禍は新たなビジネスチャンスも生み出した。web上で旅行をするオンラインツアーもその一つである。某大手旅行社のHPを除くと、1,167件ものオンラインツアーが確認できる。

本書は、ヨーロッパ、インド、東南アジア、中国、香港、台湾、韓国、アメリカ、オセアニアの9エリアを対象とした、文字通りの世界食紀行である。洒脱な筆致で展開される49の紙上ツアーは、海外に行きたくてうずうずしている諸氏にはたまらないであろう。私は、出張の移動時間を利用してこのツアーに参加した。

さすがは下渡先生。食料消費や食産業に関する統計データや、トリビアがちりばめられ、単なる紀行文集とは一線を画した構成と内容になっている。この紙上ツアーの参加者は、わずか2,200円を払うことで、3時間ほど世界の食をバーチャル体験できる。ツアー終了後にはもれなく少しだけ賢くなっている、というオマケ付きである。

さて、オムニバスの書籍は、系統立てた整理が困難であり、なかなか「書評」にはなじまない。本書に関しても、扱う9エリアを、エリア毎にとりまとめても、評者の力量ではその面白さを伝えることはできない。ということで、評者の感想やエピソードを追加しながら、いくつかの節をランダムに紹介することで書評に代えたい。

まずは、ロンドン「フィッシュアンドチップス」。フィッシュアンドチップスの「おい

*当学科教授（おの ひろし）

しくなさ」は世界中でネタ扱いされているが、改善される気配は一向にない。おそらく大英帝国のプライドにかけて、このネタを守り抜いているのだろう。ただ、パンは美味しい。普通の店であっても日本の高級店のそれを上回る。味覚が外れ値にあるわけではなさそうだが、ということは彼ら彼女らの名誉のために言っておこう。なお、ロンドンで印象に残ったのは、レストラン等の清掃員がことごとく非白人（主にアフリカ系）であったこと。階級社会を垣間見た気分になった。

続いては、マレーシア・サバ州「ボルネオ島の焼き畑農業」。ここはパーム油やマングローブについての節であり、食についての記述はほとんどない。ということで評者が勝手に補足する。マングローブを代表的する食材はガザミ。単純に美味しい。日本では高級食材扱いだが、当地では比較的簡単に採れる。日本の感覚で200リングット（約6,000円）分を注文したところ、大皿に食べきれない量が並べられ、呆然としたことがある。なお、州都コタキナバルは華僑が開発した街ということもあり、食事の心配は全く不要。余談の余談になるが、テレビの字幕についても一言。サバは多民族国家マレーシアを体現したエリア。一部の番組には、マレー語の音声に対し、英語、北京語、広東語、福建語の4つの字幕がつく。字幕で下半分が埋まった画面はかなりシュールだった。ダイバーシティとはこういうことかと、頷きながら画面に見入った。

最後は、上海「豫園のショウロンポー」。描かれているのは南京路に高層ビルが一つもなかった1995年、中国がまだまだ途上国だった時代である。評者はその10年後の2005年に上海を訪問している。貧民窟の屋台のショウロンポーは一皿1元（17円）。目の前でリアルな捕り物を観劇しながら食事したのはあとにも先にもこの一回である。

なかなか異文化体験もした。高級レストランに行った時のこと、玄関のたたきに急遽作られたテーブルに案内された。「日本人差別かよ」とブツブツ言っていたら、後から来た中国人のグループは、店の外の階段の踊り場に案内された。ビルの利用者が行き交う中、全く気にすることもなく楽しそうに食事をしていた。異文化への不理解に恥じ入った。

以上、49節のうちの3節についてコメントした。海外には慣れており、アクシデントにも動じなさそうな下渡先生だが、一人旅の不安さが吐露されている記述がいくつかあった。これは大変興味深かった。

なお、あとがきにおいて、「一部の情報は時間が経ちすぎている」との懸念が示されているが、クロスセクションのみならずタイムシリーズでの情報も入手できるのだから、これはむしろ本書の長所と言うべきであろう。出張のお供に是非一冊。

[筑波書房 2021年5月256頁 2000円＋税]